HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	元田稔の教会建築における設計手法とその特徴
Author(s)	川島, 洋一
Citation	基督教学, 39, 26-30
Issue Date	2004-06-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46676
Type	article
File Information	39_26-30.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究発表要旨

元田稔の教会建築における設計手法とその特徴

川島洋一

はじめに

本研究[1]は大正から昭和六二年まで建築活動を展開したキリスト教信者で建築家でもあった元田稔が同二〇～四〇年代に関与した教会建築の設計活動に注目し、その設計手法について考察することが目的である。本稿では現存が確認され、また廃案になった日本聖公会（以廃案下聖公会略）新潟聖パウロ教会を含めて一二棟を対象とし作品全体での設計手法とその特徴について考察した。

一．元田稔設計の教会建築

［キリスト教所属教派］ 太平洋戦争後、元田は仙台での公職から離れ昭和二七年設計事務所を開設し、具体的に教会建築に関与した一一棟を表一にまとめた。対象とした教会の日本における教派では、元田所属の聖公会が七教会、他は日本基督教団（以下教団略）三教会、日本福音ルーテル教会（以下ルーテル教会略）一教会で、その全てがプロテスタント教会（新教）でありカトリック教会（旧教）の事例はない。**［建築年代］** 事務所開設後から同三〇年代に関与した教会建築がほとんどで、以降は改修等の作品がみられ、同二九年聖公会仙台教会一期工事での会堂が最初の作品で、同三二年の二期工事増改築で現在の教会建築が完成した。同年には平行して三棟の教会を設計し落成している。同三四年～同三八年には七棟の設計を実施し、現存する作品での最後の棟は同四七年に大規模増改築された聖公会三光教会ファサードの設計である。**［建築規模構造］** RC造による教会建築は、戦災で残ったRC造外壁躯体を用いた聖公会八王子教会作品を含め五棟に導入し、他は木造外壁モルタルでの教会建築であった。屋根形態は全てが切妻屋根でRC造であっても陸屋根の事例は見られず小屋は木造、鉄骨を用いている。また延床面積では、大規模としての一〇〇坪

以上が四棟でRC造を採用し、他は中小規模の三〇～八〇坪の建物を設計している。[礼拝形態と建物外壁平面形] 教派により礼拝形態が異なるが、元田が設計した教会は全てが新教であり、礼拝室平面形は新教の典型である正面に祭壇講壇を配置した長方形単廊式の採用であった。また祭壇と信徒席を区切るコンミニオンレールは聖公会七教会に設置され教団等では見られない。建物全体でのラテンクロス平面形は前記の残存躯体使用の八王子教会を含め四棟であり、他は全て長方形平面であった。

二. 教会建築の設計手法とその特徴

二. 一. 内部空間での手法と特徴

教会建築では礼拝室空間の演出が最も重要であり、元田の作品でも礼拝室形態に種々なデザインが随所にみられるが、その特徴としては礼拝室天井を可能な限り上昇させる手法である。すなわちRC造にも水平な陸屋根ではなく切妻屋根とし、屋根裏全体天井とし左右から棟への上昇性を表現し、木造小規模作品でも方杖等の斜材を小屋組に用いて上昇性を演出していた。

二. 二. 外部空間での手法と特徴

キリスト教は日本では異教社会であり、宗教性より文化的な影響を与えてきた。従って教会の存在を明確に示す為に外観正面形態を重視されてきた歴史があり、元田作品でもその傾向が強い。対象とした一一棟の正面形を建設年代毎に図一でまとめたが、その特徴としては塔設置無しは木造棟だけで他は独立塔あるいは屋根上に置塔を置き十字架を付設した形態。また正面全体を上昇させる演出では規模によって左右されるが、水平ではなく尖塔的切妻屋根によって成されている点も特徴と言える。

廃案である聖公会新潟教会計画案（図二）でも、塔上昇手法が顕著に現れ、三光教会二期工事でのエスキスにも地面から一〇数メートルにも及ぶ独立塔のデザイン案が残されている点からも、元田の塔に固執する手法が推察できる。

三. 一九五〇年代の教会建築と元田稔の設計姿勢

三. 一. 戦後復興期における教会建築

戦後の復興期、日本社会では戦勝国のキリスト教ブー

ムによって多くの人々が教会に通い、戦前からの小規模木造建築では対応できず競って規模拡大が急がれた。

元田はこの需要に対応するように一九五〇～六〇年代に教会建築設計に関与した。しかしそれ以降、ブームは去り積極的な伝道活動から逆に教会運営が困難になり、教会建築設計の需要も急激に少なく元田が関与し完成した作品は無い。こうした時代的背景の中で実施案、計画案を合わせ五〇数棟の教会建築設計に携わったわけである。

三、二、元田稔作品にみる教会建築の設計手法

教会建築一二棟について概要と設計手法について考察してきたが、これらの作品で共通する設計手法は内・外部空間の上昇性を強調するデザインであると言える。この上昇性については、残されていた元田のメモ書き「ロマネスクの近代化」「ゴシックの近代化」から推察すると、西欧での古典的な様式を日本の近代建築として教会建築の基本としたと考えられる。すなわち戦前までのミッション、宣教師指導型での教会建築設計ではなく、日本人クリスチャンとしての証として、まず西欧文化の伝統的古典的手法の再現化を試み、建物全体の上昇性にこだわったと言える。また元田が関与した時代は高層建築はまだ見られず低層木造建築が主であった時代であり、高さを強調した教会建築は、教会所在の明確化と同時に戦勝国の文化を直接的に導入したステイタスシンボルとしての存在となった。

戦後復興期での日本における教会建築の近代化として西洋建築の古典にもどると言う元田の手法は、日本人信徒として自らの伝道姿勢から生み出されたデザインであり、単なる中世の西洋教会建築の模倣ではないと評価できる。

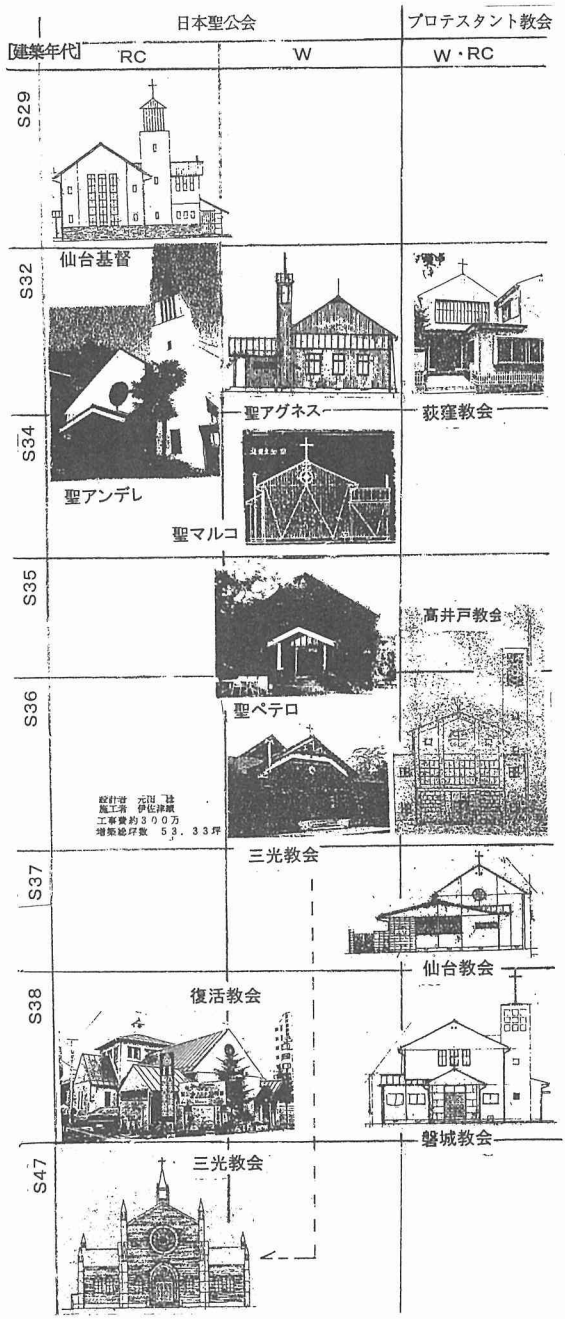
また元田稔はキリスト教精神の布教者として生きた聖公会初代司教父作之進の生き方に影響されたと考えるならば、より具体的にキリスト教精神を表現できるとして教会建築での設計活動を、自らのキリスト教伝道活動としたいと言う生き方を選んだのではないだろうか。

おわりに

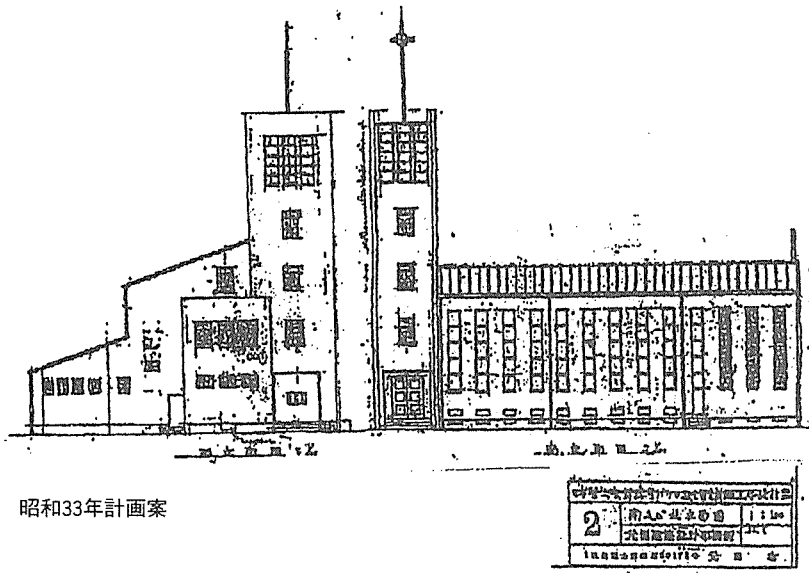
数年間に渡って元田稔の教会建築での設計手法を明らかにしてきたが、本稿では元田が関与した教会建築での共通した設計手法について考察した。今後は保存されていた元田の旧東京帝大建築学科でのノートから、教会建築について学んだ内容と実施された設計手法との関係について考察する。

註

（1）本稿は北海道基督教学会基督教学（第三〇・三一、三三～三五）で発表した研究の継続である。



（図１）元田設計11棟の教会建築ファサード



昭和33年計画案

（図２）廃案聖公会新潟聖パウロ教会の立面形

（表１）元田設計教会建築11棟の概要

		日本聖公会							日本基督教団			福音ルーテル
教会名称		仙台基督	聖アンデレ	聖アグネス	聖マルコ	聖ペテロ	三光教会	復活教会	荻窪教会	高井戸教会	磐城教会	仙台教会
現教会所在		仙台市	横浜市	東京都大森	府中市	西宮市	東京都白金	八王子市	東京都荻窪	東京都高井戸	いわき市	仙台市
初期教派		聖公会	聖公会	聖公会	聖公会	聖公会	聖公会	聖公会	日基	日基	日基	福音ルーテル
伝道開始		M26	M13	M44	M18	昭和初期	M44	M41	S05	M24	M31	S32
教会創立		M27	M18	T04	M32	S04	T01	M41	S08	M32	M38	S32
初期会堂	建築年	M38	M38	T13	M37	S04	T01	S02	S08	M26	T14	S32
	規模構造	1F煉瓦	2FW	1FW	1FW	1FW	2FW	1FRC	1FW	1FW	1FW	1FW
元田設計教会建築	建築年	S29	S32	S32	S34	S35	S36	S38	S32	S36	S38	S37
	増改築年	S32	――	S37	S41	H7地震崩壊	S47	――	――	――	後塔撤去	――
	規模構造	2FRC	1FRC	2FW	1FW	1FW	1FW・2FRC	1FRC	2FW	2FRC	1FW	1FW
	延床面積坪	157坪	122坪	73坪	49坪	38坪	128坪	61坪	81坪	242坪幼含	53坪	38坪
	屋根型	切妻	切妻	切妻	切妻	切妻	切妻	切妻	切妻	切妻	切妻	切妻
	外壁仕上	モルタル	モルタル	モルタル	モルタル	モルタル	モルタル	モルタル	モルタル	モルタル	モルタル	モルタル
	外壁平面形	ラテンクロス	ラテンクロス	長方形	長方形	長方形	ラテンクロス	ラテンクロス	長方形	長方形	長方形	正方形
	コンミニオンレール	有り	有り	有り	有り	有り	有り	有り	無し	無し	無し	無し